

環境教育と心の教育

安 部 義 和

Environmental Education and the Cultivation of Mind

Yoshikazu ABE

はじめに

現在の日本は、あらゆる分野で変革期にある。政治・経済・教育などさまざまな方面での国際的な役割が問われている。旧きよき日本の伝統を残しながら、いかにして世界の人々と協調し国際貢献をなしていくのか。この問題を解決の方向に推し進めるために、私たち一人ひとりは何をなさねばならないのか、どう変わっていかなければならないのであろうか。

欧州は「モダニズム(近代主義)」の生みの親であるから、政治の中に「ポストモダニズム」が生かされていると言われる。「モダニズム」とは、デカルトやF・ベーコンなどによる合理的な科学の近代化(外面的近代化)であり、「ポストモダニズム」とはニーチェなどによる近代主義への反省と展望の上にたった実存的な心の近代化(内面的近代化)である。外面的近代化を安易に受け入れた日本やアメリカは、内面的近代化の裏打ちが希薄であったため、そのツケに振り回されており、このことは既に崩壊した社会主義を掲げた国々はもとより、これからという発展途上の国々でもその危機を内蔵している。私たちはこの変革期を内面的近代化の波だと受け止めてこの危機的状況を乗り越えていかねばならない。

さまざまな開発や交通体系の整備は人々の生活をこの上なく便利にするし、産業経済の発展なしには現在の生活など一日として成り立たな

い。しかし一方では、これにともなう土木建築工事などの膨大な利権が金権政治や天下り行政を生み出した。CO₂の排出は地球温暖化に拍車をかけているし、食料増産も人類を飢餓から救う大切な事業であるが、化学肥料や農薬、遺伝子組替えの問題、熱帯林の破壊など様々な環境問題をも生み出してもいる。パソコンや携帯電話の便利さは、人間同士の心のつながりを希薄にし、無機的な人間関係をつくり上げてしまった。中国やインドの急速な経済発展はこの問題を益々加速させているし、グローバル化という名のアメリカ化が私たち日本人を押し潰そうとしている。人々に豊かさをもたらすはずの外面的近代化が新たな難しい課題を投げかけているのである。そこで内面的近代化であるが、このような外面的近代化の反省の上に立って、人間と自然との共生、そしてこれは特に難しいことであるが、人間(個人・民族)同士の共生をはかることを目指さねばならない。周囲の安易さや自分の弱さに流されることなく強い意志で学習し、判断し、行動しなければならない。

プラグマチズムという実用的な価値観(アメリカ的合理主義)から脱皮できずにはいるが、欧州との濃い血流を持つアメリカに対して、私たち日本人は内面的近代化をどのように捉えればよいのであろうか。明治の急速な近代化(外面)を支えたものは前代から培われてきた勤勉・忍耐・協調などの旧きよき日本の『心』(内面)であった。司馬遼太郎によれば、日露戦争を境にして双方の近代化にずれが生じ、

『心』の離脱が始まったのだ、という。巨大な西欧化の波に飲み込まれそうな、日本人らしさの喪失の危機に何らかの作用が必要であった。にもかかわらず、日本人的な解決のための思想等を生み出すことなく不幸な戦争への道を歩んだのである。戦後のGHQによる民主化は、自由・平等・権利などという極めて魅力的なものをもたらした反面、日本人の心のよりどころを失わせてしまった。占領政策の効果なのだろうか、国家はもちろんのこと家族・社会はその中心を曖昧にし、求心力を無くしていった。戦後の貧しさが『心』より『物』や『金』を大切に作る風潮を作り上げた。これまでの日本人は欧米の文化を『形』として受け取り日本文化という『心』で優しく包んで身に付けてきた。しかし、私たちは戦後、日本人としての精神的な豊かさを失った結果、日本人的思考の方法で包むことが出来なくなり、欧米人的思考の方法に迎合せざるを得なくなった。高度な技術革新は子供たちに難解な学習を要求した。一方で平等主義に基づく権利意識は、個性を無視した学習をすべての子どもたちに課そうとした。子どもたちにとって何がもっともふさわしい生き方なのかを考えることを忘れてしまった。わが子が世に言う良い子になることは当然だと思うようになった。そのうえ欧米のような宗教的な背景もない。このような状況の中で子ども達の心は潤いを失っていった。心の教育とは「生命の大切さ」、「他を思いやる心」を育てる事だが、端的に言えば「生身を知る」と言うことであろう。家族の、地域の、学校のお互いが「楽しいことは楽しい。」「苦しいことは苦しい。」「痛いことは痛い。」と素直に表現しあえる心とそれを受け容れる心を育てることであろう。

人間が住みよいように自然を改造してきた挑戦的な欧米人と違って、我々日本人は厳しい自然に忍従し、祭り事を大切にしてきた。時には談合という悪しき習慣となって表れたりもしたが、争いを避け仲良く事を解決しようとする和の精神を聖徳太子の昔より伝統的に備えている。このように歴史的に自然と和を大切にしてきた我々日本人ひとりひとりが、ふたつの共生

という課題に邁進することが最大の国際貢献なのかもしれない。

・環境教育

【1】地球的意味での環境教育（外面的・物質的環境）

1. 教科書に取り扱われている環境問題：帝国書院 新詳地理 B 等

・慢性的なもの

地球の温暖化 海面上昇 太平洋の島々（ツバル等）の水没

酸性雨 森林の枯死 大理石の彫像の溶解

水質汚濁 工場・家庭の廃水

PCB による奇形魚

フロンガス オゾン層の破壊

砂漠化 自然と人生活とのバランスの崩壊 サヘル地方・中国

熱帯林の伐採 焼畑、牧場化 経済優先の開発

産業廃棄物 発展途上国への押し付け

・突発的なもの

原発事故 チェルノブイリ(旧ソ連)

甲状腺ガン

原油流出 タンカー事故 アラスカ沖・日本海(ロシアタンカー)

戦争 ベトナム・湾岸・イラク戦争

2. 環境問題への取り組み

国連人間環境会議(1972) スウェーデン・ストックホルム

「かけがえのない地球」(宇宙船地球号)人間環境宣言

国連環境開発会議(1992) ブラジル・リオデジャネイロ

「持続可能な開発」(地球サミット)リオ宣言

地球温暖化防止京都会議(1997)日本・京都

温室効果ガス(CO₂等)排出量の削

減 京都議定書

持続可能な開発に関する世界首脳会議(2002)南アフリカ・ヨハネスブルグ

「アジェンダ21の検証」(地球環境開発サミット)

国連環境計画(UNEP)(現在)

地球に過剰な負担をかけない体系づくり

3. 学校における環境問題への取り組み

教育機器 コンピュータ(無機的結合)

環境美化 清掃活動の教育的位置付け
ゴミの焼却(ダイオキシン) 分別収集

【2】心を豊かにする意味での環境教育(内面的・精神的環境)

「人間の存在自体が環境破壊である。」と言われるまでに、我々を取り巻く環境は深い病巣に落ち込んでいる。人間は物質的豊かさ、便利さ、安易さを求めるあまり周囲の環境に対して多大な損害を与えてきた。人間の人間らしい心はどこにいったのだろう。物質的な豊かさは果たして幸福なのだろうか、便利さや安易さはどうなのだろう。物質的には満たされても、精神的な充足がともなわなければ空しいし、便利さや安易さは人を怠惰にするかもしれない。都合がよいものを利益としてきた思考回路を修正しなければならない時なのである。真の利益とは何か、幸福とは何か、自惚れを捨てた謙虚な態度こそ肝要なのである。人間の存在自体が環境破壊なら、全身全霊をあげて自然を慈しみ環境にやさしく生きることこそ人間至上の価値観とならねばならない。

環境にやさしく生きる義務をもつ我々であれば、他人にやさしく生きることの大切さも容易に理解できるであろう。「環境教育」と「心の教育」の接点は利益重視の価値観の転換から発しなければならない。産業社会においても利益優先の考え方が環境を汚染し、学校社会であっても自己中心の考え方がいじめや不登校を生み出した。環境教育を外面的(物質的)なもの

内面的(精神的)なものに分けて考えたのは、内面的な環境教育を「心の教育」と結び付けて、このむつかしい転換期の子どもたちの教育に一筋の光明を見出したいと考えたからである。

「心の教育」は、生命を大切にす心・他を思いやる心・倫理観や正義感・美しいものに感動する心などの豊かな人間性を育成することが大切である。自然の生命を破壊することは、我々の生存をも危うくする。他人を否定することは、自己の人生を閉ざすことにもつながりかねない。体罰のない心に響く生徒指導は相互に慈しみ理解しあうことから始めねばならない。現在、我々がおかれている学校・家庭・社会の教育環境の背景をさぐりながら「心の教育」について考えてみたい。

1. 学校における教育環境

エコノミック・アニマルと国際貢献

もう十数年も前になるが、欧州をはじめアメリカ・カナダ・オーストラリアなどから約30名のハイスクールの先生方が当時の勤務校であった大分豊府高校を訪れたことがある。その際、教職員と懇談会をもったのだが、何か話題をとということで、次のような質問をした。「私たち日本の先生はエコノミック・アニマルを育てるのは上手なのだが、あなたがたは国際貢献を教えるのが上手い。秘訣を教えてください。」話題を提供するつもりが、結果的には場を白けさせるような雰囲気になりかけた時、カナダの先生が口を開いた。「国際貢献を教えるのには、途方もない長い時間がかかるのです。」たったこれだけの短い言葉であったが妙に言い当てている。我々日本人は合理的な教育課程を組み、きわめて能率的な日課表なるものをつくって、順序どおりに規則正しく知識を授ける。生徒の頭の中は知識のタンスで、きちんと整理すればするほど多くの知識が蓄えられる。その知識と勤勉さで品質管理の行き届いた安価な工業製品を世界市場に送り出し富を得た。無駄と名のつくものはすべて排除することが正義だったのである。途方もない時間を必要とする国際貢献は、不合理以外のなにものでもなく、それに当てるべき時間の余裕も心の余裕も

なかったのである。教科は受験に必要なものを優先し、情操教育のような分野は軽んじられた。形にならない一見無駄のようなものの中に人の心を教える要素が多くあるとしたら皮肉な話である。どうも我々日本人は利益を追いかけることには聡いが、利益の姿が曖昧になると失速するような傾向をもつ。「世のため、他人のため」に我が身を置いて、世界の人々のために貢献できるような日本人になるためには、教養を積んで、物の本質をしっかりと見抜く目を養うという基本的な価値観の部分から教えなければならない。そのために莫大な時間がかかったとしても覚悟しなければなるまい。

集団から個へ

従来の生徒指導は「規則を守らせる」「言うことを聞かせる」ということに主眼を置いた。それは集団を重視した産業社会の一員として学校が位置づけられたからである。このことは効率を求める産業社会の中であって、学校だけが独自の哲学で運営されるということは考えにくいことから、むしろ必然であったと考える方がよいのかも知れない。産業社会は均質な品物を大量生産して、人々に豊かさと便利さを提供した。しかし、その中にさまざまな制約をも生じせしめた。豊かさの恩恵を得るためには、守らねばならない規則というものが生まれたのである。『これは人間社会のすべての場面で派生した事実で、思いもかけぬ音楽の世界にも生じている。宮廷音楽華やかなりし頃の四重奏や五重奏は、自由奔放かつ天才的な弾き回しで観客を魅了したが、観客は少数で単価は相当高くついたと思われる。それにひきかえオーケストラは一度に大量の観客を相手にするので、よい音楽を安い値段で提供することができるし、一度に数多くの人々が等しくその恩恵を受けることとなった。と同時に演奏者には弾き方、観客には聞き方の作法など集団としての規制が加わったことは言うまでもない。』(アルピン・トフラー、「第三の波」) 産業社会における学校は、これらの例に漏れる事なく、多数の生徒に平等に教育を施し、均質な結果を与えるため集団としての機能を高めてきた。集団の一員たる自覚

としての、制服・制帽・校章・バッジ等々は集団意識の高揚に役立つので規則となり、また多数の生徒が一斉に授業を始めるために遅刻や欠席は大罪となった。そのような規律正しい生活を基盤にしたからこそ、多数の生徒が充実した教育内容を安い値段で受けられるし、等しい条件で就職や進学ができるようになったわけである。勤勉な人がつくれば良質な品物ができ、怠惰な人がつくれば粗悪な品物ができるとなると不均衡な社会では2人が同等の利益を手にするなどとても出来ない。工場では粗悪品をなくし、良質かつ均質な品物を大量に生産するため個人にたいしてさまざまな規則や制約があるように、学校においても平等な恩恵を手にするためには、「規則を守り、言うことを聞かねばならぬ」というのもひとつの道理であろう。しかし、産業社会は今その姿を徐々に変えようとしている。パソコンをはじめとする通信機器の発達は、家庭を仕事場と変え定刻に職場に出勤する必要をなくすだろうし、給与は労働時間に対してではなく仕事の内容に対して支払われるようになるだろう。能力のある者は短時間で済ませるので、時間の単価をいくらでも上げることができるようになる。労働時間という概念がなくなれば、遅刻や欠席への関心は頭から消え去ってしまう。高度経済成長期に日本が世界の産業社会を制することが出来たのも、「個」を重んずる欧米を抜き去ることが出来たのも、「和をもって貴しとなす」という集団意識の賜物であった。確かに産業社会は集団意識によって支えられてきたのである。しかし、日本の産業社会は既に爛熟期の症状を呈するようになって、産業の空洞化現象が顕著となり、労働時間を問題としないような知的産業が国内の労働市場に参入してきた。このような情報社会への進化の中で、今まで当たり前だと考えていた「規則」や「指導法」が全く姿を変えてしまうことは当然の如く考えられる。このような時代の流れを背景にして、人生観や価値観が多様化すると生徒指導の基本的立場は「規則を守らせる」「言うことを聞かせる」といった集団から発する価値観から、主体的自主的に個から発する価

値観へと重心を移していかなばならなくなる。この兼ね合いは、過渡期であるが故にきわめて難しい問題を含んでいるし、避けては通れない道でもある。

便利さや安易さが失わせたもの

「不登校」はある種の病気と似ていて学校に体力のある時期には現れにくく、体力のおちた今、あちこちに病巣を拡げている。学校の体力とは、誰もが入学したいと願う求心力であり、地域や社会への波及効果すなわち遠心力である。求心力は遠心力を生み、遠心力は求心力に拍車をかける。高度成長期以前、高校への進学が困難だった頃の生徒の学校に対する思い入れや意欲はきわめて旺盛で、不登校の問題などはそれほど目立った存在ではなかった。この時期は学校に行きたいと念ずる個が学校という集団を強烈に求めていた時代である。手に入れることが困難なものほど求める力が大きくなる。この時代の学校は貧しくても体力があった。主体性を備えたとひとりひとりの生徒が活性化の原動力となった。しかし、少子化などの影響でほとんどすべての生徒が高校に進学するようになった現在では、この安易さが求心力を弱め、集団の箍を緩め、個を求める分散への作用として働いている。安易さは「ヨダキサ」を生み、「したいことはするが、めんどろなことはしない。」また「好きなことはよいこと、嫌いなことはよくないこと。」といったような気まぐれを生み出したし、個々の善悪の判断をも曖昧なものにした。電子レンジや全自動洗濯機の便利さは、夕食の準備に精を出している母親をみて「お母さんのため好き嫌いを言わずに食べよう。」とか、たらいで汗を流して洗濯している母のために「汚さないようにしよう。」といった基本的な心の結合をも希薄にした。このように便利さや安易さは、すべてのものに対する求心力や感情を奪い、無関心の中に彼らを放り出した。現代社会のもつこれらの構造的な背景を考えると、学校単独で事の解決にあたらうとしても容易ではない。家庭や地域社会と連携・協力して、学校を魅力あるものにして、集団帰属意識を高めなければならない。

豊かさを求めるあまり失ったもの

社会生活を営むとき、我々が直面する人の世は、利益で結ばれた関係（外的結合）と心で結ばれた関係（内的結合）との二面性をもっている。そして、このことは同時に作用されなければならない運命にある。たとえばバスに乗ったとき乗客は料金を支払うと同時に「安全に運んでもらったことを感謝する。」運転手は料金を頂くと同時に「生活が出来ることを感謝する。」この『料金の授受』が外的結合であり、『感謝しあう心』が内的結合である。外的結合は豊かな物質生活を約束するものであるが、そのためには血のにじむような努力をして、高度な技術を身につけなければならない。高度な技術を修得し物質的に豊かな生活を実現してみても、なにか満たされない空虚さがつきまとうことがある、それは同時に作用しなければならぬ内的結合の欠落に原因があると思われる。我々は終戦後の貧しさから脱却したいあまり、豊かになることを何にも増して優先させてきた。その結果、知らず知らずのうちに価値観に歪みが生じ、利益関係を最重視するような風潮を身につけてしまった。これが無意識のうちに心を覆い、自分の利益になることには目の色を変えるが、世のため人のためのこととなると関心を示さなくなるような傾向が一般的な人々にまで及ぶに至って、さまざまな弊害を生む結果となった。大学受験に必要な科目だけを重視して、豊かな情操を育てる科目の学習を軽んじたり、授業ひとつとってみても知識の授受という利益関係のみに執心し、感謝・愛情といった心の結合を見失っているのではあるまいか。すでに過去のこととなったが、正課クラブは失われたバランスを修復するために教育観念が生み出した産物である。しかし、よりよく定着したとはどうい思われぬ。これは利益関係により過ぎたバランス傾向を、「ゆとりの心と時間」をもたせるという方法で一挙に正そうとして、それ自身のバランス感覚を失ったからである。なぜならクラブの時間には利益関係のつながりがあまりにも欠落していたのである。このように利益関係の希薄な場合のアンバランスは、それ自身

の存在さえ危ぶまれるほどの厳しい利益優先という認識の固定観念が無意識のうちに働くのである。先ほどから述べているように利益（外的結合）と心（内的結合）との関係は、バランスよく同時に作用されなければならない運命にあるからである。言い換えれば利益関係は心の関係に発展させる大チャンスであり、また心の結び付きは利益関係に好結果をもたらす絶好の機会でもある。我々はこのことを大いに活用して社会のなおいっそうの活性化を図らなければならない。

学校の存在価値

本質を見る目を養い、基本的な価値観を育むためには道徳の基本を明確にしなければならない。とともに学校の存在価値を再認識しなければならない。社会における規則や法は、最低のことを規制しているわけであるから、守らねば命にかかわったり、人生をあらぬ方向に狂わせたり、すべては結果として自分自身に降りかかってくる。一方、学校の規則は窮屈に感じても、これに違反したからといって命が危なくなったり、将来の人生に深くかわりをもつということもない。社会は実践の場であり、学校は練習の場なのである。練習だから厳しくやかましく言うのである。どこのサッカー部も野球部もいい加減な練習をしていて勝てるわけがない。書道は楷書から、絵画はデッサンから練習に練習を重ねて自分の世界（抽象の世界）を創造する。練習もせずに、未熟なままに自分の世界を早く創ろうとあせったり、苦勞をいやがったりすれば無理矢理自分の考えに周囲をあわせようとしなければならない。そして、独善に浸った自分の世界が社会から遊離していることに自分自身気づかない。神戸の児童連続殺傷事件（サカキバラ）は、病的な面が支配的だと思うが、このような人生の練習不足も大いに関係があると思われる。同じく神戸の校門圧死事件でも、けっして許される指導でないことは明白であるが、なぜあのような行き過ぎた遅刻防止の指導をしなければならないか、という立場で報じたマスコミは少なかった。おびただしい遅刻生の数が学校としての秩序を破壊して

いたのではないかという状況も想像できなくはない。人生の練習の場としての学校の存在価値をすべての生徒が再認識しなければならない。

また、学校（集団）は生徒を指導する意味である種の権威といったものが必要であるが、昨今ではこのことを否定する論調がマスコミなどで報じられている。学校（集団）の権威はなくても良いが、そのためには一人一人（個）の心の中に学校の権威に代わる自律心といったものが育たない限りなくすことは極めて難しい事だと考えるのが現実的であろう。

2. 家庭における教育環境

家庭の教育力の背景（子供の個性にふさわしい生き方の選択）

子どもは多種多様である。さまざまな生き方を望んでいる。そのことを我々はどのように受けとめればよいのであろうか。

プラトンの禁欲主義は崖淵に線を引いてこれから先は危険だから一歩たりとも入ってはならぬと言っているようである。崖の下は悪の巣窟であり、線と崖の間は欲望の領域である。人々は線の内側の安全な場所で時を過ごし、誰一人線を越えて崖淵に近付こうとしない。しかし崖淵には魅力がいっぱい、欲望の世界は人を虜にし、崖の下に落とさんと待ち構えている。人は元来賢い者だから危険と知って危険を犯すような愚をなす事は決してない。もし落ちる者がいるとすれば危険を察知出来なかったか、それとも危険を安全と思い違いをした結果である。だから一人一人がしっかり学んで危険とは何かの知識を身につければ少しも心配はないとソクラテスは言う。人を信じ自ら毒杯をあおったソクラテスをプラトンはいかに無念の思いで見たことか。その反省の上になつて為政者が人々を厳しく教育し統率しなければならぬと国家論を説いた。双方はアテネの民主体制とスパルタの国家主義体制にみる事が出来よう。我々は個々の知識を大切に民主制の花を咲かせたソクラテスと、腐敗した民主制を批判して全体を重んずる国家主義的なプラトンとの違いを知ると同時にベルリンの壁の崩壊とは逆にあたるこの歴史の流れにも注目すべきである。（どこ

かの成人式ではないが、自由を履き違えると、反動的に統制の時代への扉を叩くことになる。)

人は弱い存在であるから崖は危険であると知っていても好奇心のあまりつい近付いて奈落の底に落ちることだってよくある。ソクラテスのように知るだけでは不十分であり行動が伴うよう訓練し、習慣づけなければ意味がないとアリストテレスは言う。そう言えば挨拶をすることはよいことだと知っていてもできない者はたくさんいるし、万引を経験した人はそれが悪いことだと10人が10人皆知っている。「淑徳がなくともうわべだけでもあるふりをなさい。習慣という怪物は悪いという感覚をすべて喰い尽くす悪魔ですが、その反面に正しく善い行いにも美しい服装を与えておいおい身にそぐわせてくれる天使なのです。」これはハムレットが母である王妃の大罪を責めた後に諭したセリフである。

さて、我々は子どもを一方向的に信じて鷹揚に振る舞うソクラテスたるべきか、厳しい統率力で迫るプラトンか、はた又合理性で接するアリストテレスたるべきか。ソクラテス型の指導にふさわしい子どもは教えられなくても先生から知識を引き出すような積極性と独立心をもち、創造性が豊かでどこか天才的なひらめきをもつタイプ。アリストテレス型・行いが正しく気持ちが穏やかで勉強する事が好きで自律心にとんだタイプ。これは官僚や大企業のエリート社員向きの実務型であるが創造性に難がありそう。プラトン型の指導にふさわしい子どもたちは一般的な人々に共通して見られる大衆型。やれと言われなければやらない。やるなと言われるとやりたくなる。それに従うか否かは別にして何か他律的な制限がないと社会生活が安心しておくれなタイプ。しかし、生産活動には大いに活躍して貰わねばならない。才人はソクラテス型、努力家はアリストテレス型、怠惰な凡人はプラトン型と割り切りたいところだが世間はそう簡単にはおさまらぬようにできている。なにしろここは世界で最も自由で平等な国「日本」である。努力する能力がないのに努力すれば出来ると思い込んだり、果ては才能があると勘違

いしたりするからである。「あの人に出来る事があなたに出来ぬ訳がない。」は「あの人に出来る事があなたには出来ないかも知れぬが、あなたの出来る事があの人に出来るとは限らない。」と考えるべきだし、「やれば出来る。」は「やらねば出来ぬ。」と言うべきかも知れない。怠惰な凡人を天才教育の環境に置けば益々怠惰になるし、才人を型にはめて無理強いするとせつかくの才能が開花せずに終わってしまう。多種多様な子どもたちが混然としている現在の学校では単に平等に扱うことのみを強調するのではなく、教育を受ける方もする方も冷静にお互いを観察して各々にふさわしい教育の方法を見いだす必要があるのではなからうか。そうでなければ子どもたちの心はいつまでたっても休まることないだろう。ただここで最も大切な事は、怠惰な自分にあつた方法を探すことにのみ力を浪費するのではなく、最善に努力した自分にふさわしい方法を見いだそうとする事であらう。

家庭の中心・よりどころの復活

父親の復権

家庭内暴力といえれば日本では子供が親に対してはたらく行為であるが、欧米では親が子供に対してはたらくのが一般的なのだと言う。だからアメリカでは子どもを守るためのきめ細かい立法がなされていて、移住した日本人の親たちが子どもたちに対して日本国内と同じように振舞っていると思いがけず窮地に陥ることがあるという。日本における子ども中心の家庭環境というものはどのようにして生じてきたのだろうか。日本は古来、天照大神の時代から母系社会だと言われる。武力を前面に出した鎌倉時代から戦前・戦中までは家督制度を支えた男性中心の父系社会のように見える。しかし、底流には女性の力が脈打ち、戦後、「強くなったのは靴下と女性」などと言われ、顕在化しはじめた。未曾有の高度経済成長が実現できたのは、しっかりした母親が家庭を守っていればこそであり、父親は家庭のことなど何一つ心配することなく仕事に集中できたからである。しかし、潜在的であればこそ発揮した母親の力が表面化し

てきた現在では、財布の紐を一手に握る母親の力は家庭内において最も強い存在となったのである。少子化の進んだ昨今では、多くの母親は可愛さのあまり我が子に甘くなってしまい、兄弟姉妹どうして競い合ったり我慢しあったりすることもなくなった。家庭内の力関係は甘やかされた子どもが最大の権力者として浮揚してくる。欧米のような父系社会では子どもは家庭の中で誰よりも弱い存在である。トマス・モアの「ユートピア」は平等観念を強調しているが、子ども達の食事は大人の余り物を傍らで分けてもらうだけでテーブルに着くための椅子すらない。子供の遠足の日、父親のお弁当のおかずが日頃とみちがえるようなお国柄とは似ても似つかない。欧米の「レディーファースト」と日本の「夫をたてる」は、「本当に強い者は表面に現れぬのがよい」という精神の表現であると考えれば妙に納得できる。女性の地位の向上とは男性並になることではなく、男性並はけっしてよくないと言うことに気づくことにある。これが日本の母系社会の基本である。家庭には中心がなくてはならないが、それが子供であってはならない。それは外ならぬ母親の潜在的な力に支えられた父親でなければならぬのである。

基本的生活習慣

父親を尊敬の対象に祭り上げておけばおくほど、さまざまな意味で都合がよい。細かなことは「お父さんに言い付けますよ。」で事がすむようになるからである。特に躰のことなど生活の基本的習慣にかかわることなどは、意外とかんたんに教育できるかも知れない。母親の言うことを聞かぬとき、その上にもうひとつ指導のクッション（余裕）があるかないかでは大変な違いである。そしてその落差は大きいほど効果がある。父親もこのあたりに目覚めて尊敬の対象たるべく努力をしなければならない。父親は家族の尊敬を一身に集める威厳を、母親は父親をたてて家族全員にそそぐ愛情を、子ども達は人生を切り開く主体性をそれぞれ身につけてはじめてひとつのまとまりのある家族が構成される。ここに健全な家庭の教育力が育まれ、お互いの責任が生まれるのである。

家庭での教育力を見失った親たちが言う「親の言うことは聞かないが、先生の言うことは聞きますので、よろしく。」かくして家庭教育でやらねばならぬことが学校に持ち込まれることとなった。日本の学校は大忙しである。挨拶をはじめとする躰から難解な入試問題まで何でも引き受けなければならない。親の言うことを聞かない子ども達は、先生の言うことも聞かなくなるかもしれない。その時は「学校の言うことは聞かないが、警察の言うことは聞きますので、よろしく。」これは笑い話のようで、決してそうではない。教育は、幼少期から青年期の最もふさわしい時期に、家庭・学校・社会などの最もふさわしい場所で、的確に行わねばとりかえしのつかないことになる。そのような意味でも家庭教育は、核家族としての伝統をもたない日本の社会における家族のあり方と併せて再認識しなければならない急務の課題である。

3. 社会（地域）における教育環境

地域の教育力の背景

現在、大友宗麟公の銅像がある JR 大分駅前 の噴水のあたりは、昭和30年頃はフェニックスと芝生の庭園であった。そこには「芝生に入るな」と書いた小さな四角い木製の看板が立てられていた。しかし、広場の少ない大分駅前付近に住む子どもたちには恰好の遊び場で、鬼ごっこをしたり、野球をしたり、玉の海（大分市浜町出身の相撲取り）が優勝したことなどを街頭放送で聞きながら日が暮れるまで無心に遊んだものだった。そこに川上のおじさんが犬を連れてやって来る。おじさんは市役所の用務員さんのような仕事をしていて、朝夕大分市の旗を上げ下げに来るのである。子どもたちは蜘蛛の巣を散らすように逃げる。追いかけるようにおじさんの罵声が飛ぶ。捕まったら大変なお仕置きを受けるので必死で逃げた。そして毎日のようにこれを繰り返した。犬に尻は噛まれるし、「あんな人情のないおじさんはいない。」と当時は思ったが、今振り返ってみると貴重な人だったのかも知れない。子どもたちの心に悪いことをしているという気持ちを植え付けたから

である。上野の墓地公園あたりは、現在よりも鬱蒼とした森で、小学生のころ近所の同級生が迷い込んで2～3日帰らなかったことがある。

「蝉捕り坊や行方不明」と大分合同新聞で大きく報じられ皆で捜し回ったのであるが、大方の大人たちは狐に化かされたのだと言っていた。ここも又恰好の遊び場で、皆で連れ添って山に入るのだが、リーダーである上級生の指示した遊びのプログラムで一日中遊んだ。食べられる木の実があると、序列に従って食べた。序列はおよそ年齢で決まるが、木に登ったり飛び降りたり勇気を試されて序列が上がったり下がったりもした。時には喧嘩も起きるが序列がはっきりしているのですぐにおさまった。このように社会や地域での教育は、大人と子ども、或いは子ども同士の間で自然のうちにやられてきた。しかし、近頃は他人にいやがられる思いはしたくない、反発されたら鬱陶しいと考えるのか、やかましく言う大人がいなくなった。このことと相関関係があるのかないのか、学校への苦情の電話は頓に多くなった。社会教育の分野も学校教育への依存が目立つようになったのである。力が支配するものをなにがなんでも根絶しなければならないという画一的な平等論が、学校では上級生と下級生の関係、地域においてはガキ大将といったような子供たちにとっては自然な秩序機構というものを破壊してしまった。地域や社会での教育というものは、学校や家庭の枠をはずしたところで自由に伸び伸びと行わなければならない。悪いことをしていても注意をされなければ良いのかと思ったり、注意をされたら反撃したりする傍若無人な若者を見ると周囲の力の無さをしみじみ感じる。

今はビルが建ち並んでいる大分駅前も、南新町と呼ばれた時代（～昭和37年）は背戸と路地の入り込んだ情緒豊かな町だった。自治活動は旧来の姿で継続して来たのだが、近年住民の転出が相次ぎ居住世帯数が激減したことや、町名変更等で不合理な面が多くなったことで、南新町町内会は平成9年1月にその幕を閉じることとなった。この時まとめられた小冊子「南新町今昔 半世紀の思いで」の中で、当時の住人

が昔の地域社会のことをなつかしく綴っている。

「私達は、その時代、町内の大人やおばあさまやずっと上の年齢の人達とも遊んでいたことを思い出しました。私は女のくせして独楽回しやネンボク倒しをやったり、パッチン・ビーロンなどの遊びを教えられたけれど、とても弱くてよくパチアゲられた事を覚えています。でも上級生とか親分のような素晴らしいリーダーがいて、自分の勝った分を『ホラッ』と言ってくれる。それがとても印象深く残っています。今の子供のように孤独でなく、私を母のない淋しさに嘆くこともなく明るく心豊かに育ててくれたのです。」(荒巻トシ子氏)

「私の家の周囲のほんの数メートルの範囲に背戸が幾つもあって、それが路地で繋がってひとつのえもいえぬ世界をつくり上げていた。夏は皆で涼み台を出して、家族のような夕食後の一時を過ごした。成績がよいと隣のおばちゃんが褒めてくれたし、喧嘩をすると前の小父さんに叱られた。うちわで蚊を追いながら、将棋をしたり、線香花火をしたり蚊取り線香が尽きるまでお互いに人情の機微に触れ合った。」(安部義和)

「毎年12月24日、冬休みに入ったその晩から、4年生以上が集合して『火の用心』カチッカチツの拍子木にあわせて、寒風も雪も吹き飛ばして、町内を連呼巡回したあの当時の子供たちの元気さは忘れることができない。」(小野久生氏)

旧き良き地域社会には、そのものに教育の力があつた。このような環境の中に社会教育の原点を見るような気がする。あらゆる面で変化して来た現在、このとおりに再現するのは到底不可能かも知れない。しかし、今の世代に合ったような形でこの精神を生かすことは、我々の知恵の範疇ではなかるうか。

・おわりに

「環境教育と心の教育」として、学校教育環境・家庭教育環境・社会教育環境の三方面から

その背景を探ってみた。ここではさまざまな問題を掘り起こそうとしたところであり、解決の手段を見いだすには到底至っていない。しかし、学校においては道德の基本を明確にする教育を具体的に提示し、教育課程の内容に加えて行く努力も急がなければならない。また、「大集団をどう指導するか。」というテーマから、集団を細かく分けて「小集団による主体的な活動をどう指導するか。」というテーマへ移行させるとすれば、学校行事についての考え方も180度転換するかも知れない。高校3年間のうち自分にふさわしい時期に、課題を共有する仲間と、ふさわしい場所を選んで旅行し、レポートを提出して認定を受けるような修学旅行も有り得るかも知れない。土曜日を家族の日や地域の日として、学生が主体になって家族・地域おこしのイベントを具体的に考えることもできよう。このような現実的な活動と環境問題とを結びつけながら環境と教育の問題を継続して考えていくことは、現代社会の教育環境を見るに当たり極めて大切なことだと思われる。

参考文献

- ・バートランド・ラッセル著(1996)市川三郎 訳 西洋哲学史 みすず書店
- ・森新三著(1997) 修身教授録 致知出版社
- ・司馬遼太郎著(1996) この国のかたち 文藝春秋
- ・藤原正彦著(2005) 国家の品格 新潮文庫
- ・南新町町内会監修(1996) 南新町今昔 半世紀の思い出 日の丸印刷